

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520654

研究課題名（和文）弥生時代集落の広さと居住人口復元に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic studies for the reconstruction of residential areas and populations in settlements at Yayoi Period

研究代表者 伊藤 淳史 (ITO ATSUSHI)

京都大学・文化財総合研究センター・助教

研究者番号：70252400

研究成果の概要（和文）：西日本における弥生時代遺跡の情報を収集し、集落面積および居住人口復元のための基礎資料としてデータベース化の作業を実施した。とくに近畿地方の遺跡については、遺構やその帰属時期・出土遺物についても詳細なデータを収集し、時期別変遷についての数量的分析をおこなうとともに、居住面積や想定人口算出のシミュレーションの条件を整えた。また、あわせて重要遺跡の未公開資料の報告も可能な限り実施し、福井県小浜市所在弥生前期遺跡の丸山河床遺跡についての情報を刊行し公開した。

研究成果の概要（英文）：This research collected all archaeological information of sites at Yayoi period in western Japan and build up database for the reconstruction of residential areas and populations. At the same time, studied and published unreported data about important sites at Yayoi Period.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：弥生時代、遺跡、集落、人口

1. 研究開始当初の背景

弥生時代の研究は、列島最初の水稲農耕社会の具体像という関心から進んで、近年では、初期的な国家形成への歩みをはじめの段階の社会という評価のもと、首長層の形成や性格、階層分化のありように関心が集まりつつある。佐賀県吉野ヶ里遺跡、大阪府池上曽根遺跡などの発掘調査成果が象徴的に示すように、弥生時代後半期には、集住の著しい大規模集落が形成され、環濠や大型建物をはじめとする諸施設が設けられていると明らかにされたことが、「弥生都市論」などと呼

ばれるテーマが一般化するような研究動向に大きく作用している（たとえば、広瀬和雄「弥生都市の成立」『考古学研究』第45巻3号、34-56頁、1998年12月）。しかし、これらの発掘成果は断片であり、特異な一部分から全体を推し量る傾向は否めない。当該時期の集落の様相が総体として明らかにされるなかで、成果を相対化してとらえる必要がある。

上記のような国内の現況に対して、欧米諸国の集落考古学すなわち「Settlement Archaeology」は、対象地域内の遺跡の諸属

性の悉皆調査を基本にする点で、対極にある。そして、面積や人口といった数値的情報をコンピューターにより積極的に復元・比較しながら、遺跡間の階層差を把握し、地域の社会構造モデルを策定することを目指している。しかし、日本考古学に積極的に適用された事例はないのが現状であった。

2. 研究の目的

上記の背景を受け、今後さらに弥生時代研究に寄与していくためには、目的意識を持った遺跡情報の集積結果を統一的かつ悉皆的に蓄積することが必要であること、また日本考古学の成果として世界に発信していくために、計量的検討に耐える客観的指標の呈示が不可欠である、と考えるに至った。豊富な日本の遺跡調査情報を活かしながら、成果を国際的な議論にも耐えるように発信するためには、特異な一部から全体を推し量る手法ではなく、地域総体の状況を明らかにした上で、個別成果を相対化して位置づける必要がある。そして、面積や人口といった数値的情報を積極的に復元して、議論の共通の基準や明確な指標を示す必要がある。これらを実施可能な研究基盤を構築することを研究の最大目的とした。

3. 研究の方法

上述の目的を達成するために以下の3つの段階を踏んで研究を遂行することとした。

- (1) 弥生時代集落に関連する調査成果情報を各地域で網羅的に集成し、データベースなどに整備することで、計量的検討に耐える客観的指標となる居住空間の面積および居住人口の想定のための基盤を整える。
- (2) 調査成果が公刊されていないものについては、資料整理を実施して極力利用可能な情報を公表し研究に資するものとしていく。
- (3) 上記の結果と蓄積したデータを活用して、集落面積と居住人口復元のシミュレーションを実施し、計量的な比較検討をおこなう。そして、集落の類型や階層性を抽出して、弥生社会の発展度を検証するための社会モデルを呈示する。なお、それに際して、歴史時代や日本以外の諸外国における人口学研究の手法や視点についても極力収集と把握を心掛け、日本考古学での紹介適用を意識する。

4. 研究成果

(1) 西日本を中心とした弥生時代遺跡の情報を集積し、とくに近畿地方の一部については詳細な位置情報、出土遺構や遺物内容も含めたデータベースを作成することが出来、集落面積や人口復元シミュレーションの基盤として活用可能となった。

①以上のデータの内、京都府南部地域の縄文晩期末～古墳前期に至る 228 遺跡の詳細遺跡

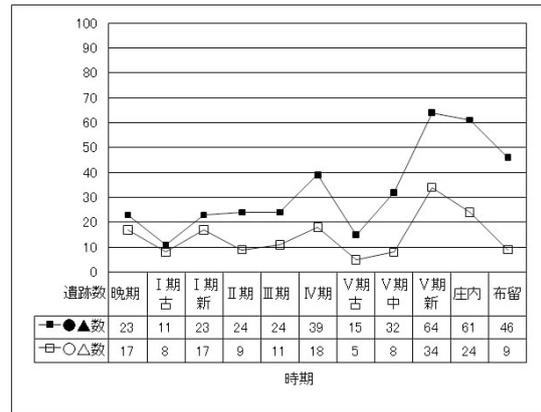


図1 京都府南部地域時期別遺跡数変動

情報を解析し、小地域内における時期別遺跡数の変動を確認した(図1)。遺構多数が確認され信頼度の高い遺跡(●▲)と、遺物採集レベルのやや信頼度の低い遺跡(○△)双方での変遷をみたが、いずれも同様の軌跡を描く。IV期までの漸増傾向がV期古段階に急激に減少し、その後中段階遺構一気に増加した後、庄内期遺構再び減少する。すなわち後期以降の劇的な人口変動があらためて示された。ただし、単純遺跡数のみでは、その具体的内容を考察することは不可能である。

②上記課題の解決のために、遺構種類別の変動についても検討を加えた(図2)。結果、

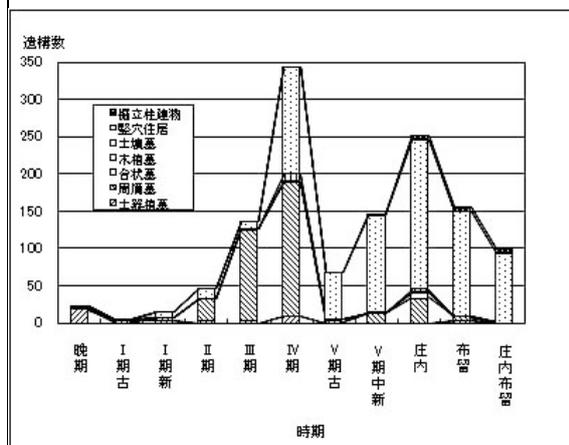


図2 遺構数時期別変動

住居数についてはIV期以降の減少幅は少なく(薄い梨地の部分)、一方で墳墓数については(右下がり斜線部分)V期以降減少後には増加率がきわめてとぼしいことが判明した。このことは、V期以降の墳墓造営階層の限定すなわち社会の階層化進展を如実に示すものであり、人口変動の検討においても十分に留意すべき背景といえる。庄内期以降は遺跡数の減少にかかわらず住居数はほとんど減少していないことは、集落間の階層分化を反映している可能性がある。今後の集落面積算定とあわせた解析が課題となるであろう。

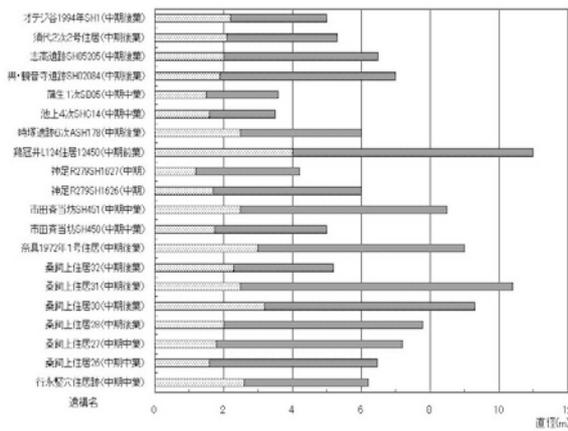


図3 竪穴住居直径中の2柱間距離比率

③以上に加えて、発掘条件に恵まれた竪穴住居のうち、「松菊里型住居」と呼称される中央部に2柱穴を有する形状の竪穴住居に関して、全体の直径に占める2柱穴間の距離（グラフ中の薄い梨地の部分）を算出し、グラフ化して比較をおこなった。松菊里型住居については、渡来系の住居形式とする指摘もあり、人口変動を検討するうえでもその内実を明らかにしておくことが求められるからである。結果として、京都府下でその可能性が指摘できる事例については、直径の差異にかかわらず2柱間距離は2m前後に収斂していることが明らかとなった。このことは、特徴的な2柱穴が特定の住居形態にとまとうと言うよりも、炉周辺での特定の活動すなわち工房的な機能に付帯する属性であることを示している。よって、この遺構が顕在化することをもって、弥生中期に渡来系の人口変動を想定する根拠とはできないことが、明らかに出来た。

(2)人口復元シミュレーションに関しては、歴史人口学分野での研究蓄積を学習する必要が求められ、それらの研究史と現状を把握するとともに、内外における考古学分野での先行例については詳細に整理・検討して課題を抽出し、本研究での今後の実施に備えた。国内においては、速水融による近世期の文書史料を用いた体系的かつ包括的な研究が大成されたため（速水融 2009『歴史人口学研究』）、その手法の理解に努めた。国外においては、考古学分野での概説書も刊行されており（Andrew Chamberlain 2006 *Demography in Archaeology*）この訳出・紹介作業を進めた。以上をもとにして、今後集積されたデータの解析方法を試行し、研究期間中には果たせなかった人口変動シミュレーションを実施して社会モデルの作成をおこなうとともに、基礎作業として蓄積した研究史についても、日本考古学において理解の薄い分野であるため機会を得て順次公表していく予定である。

(3) 研究のもうひとつの柱である未公表資料の公開については、近畿北部の日本海側（但馬・丹後・北～中丹波・若狭）地域において、日本海岸で最東端となる遠賀川式多量出土遺跡である小浜市丸山河床遺跡の未報告資料を整理報告し、あわせて弥生前期前後を中心とする遺跡の詳細情報を検討した。

①小浜市所在の丸山河床遺跡は、昭和62年に北川河川改修工事に際して不時発見され、福井県立若狭歴史民俗資料館によって緊急調査と遺物回収がなされた遺跡である。計1000点あまりの弥生前期土器片が出土したとされ、日本海側における同種の土器の出土遺跡の東端として注目されてきた。にもかかわらず、資料は『小浜市史』（1992年）に一部が紹介されたのみで全容が不明なままであり、近年若狭地域であらたな弥生時代遺跡の調査が相次ぐ中で、その詳細な報告が喫緊の課題となっていたものである。

今回あらためて資料を精査し、出土遺物の観察・図化と報告を実施した。その結果、綾羅木系文様と呼ばれるような山陰地方と同特徴の貝殻羽状施文の遠賀川式土器を含み、また甕口縁部の刻目を有さないものがなかば以上を占めるなど、丹後～因幡地域などとも同様な特徴をもつ土器群であることが明らかとなった。このことは、若狭湾岸への弥生文化の伝播が、基本的に日本海側の系譜によることを明確示すものである。

同時に、3点のみではあるが、突帯文土器資料が存在することがわかり、これまで全く不明であった別系譜の土器群の併存可能性も指摘されることとなった（図4）。これらは、突帯文土器でありながら、内外面の条痕調整や突帯上を刺突するなど、未知の特徴を有するものであり、従来若狭湾岸以外の地域でも知られていないものである。若狭湾岸そのものの弥生前期の状況がはっきりしないなかで、その前期土器の具体的内容と系譜が示唆できたことのほかに、こうした並存可能性が指摘できる異系統土器を指摘できたことは、弥生時代日本海域におけるひとの移動交流を明らかにする上でもきわめて意義は大きい。今後北陸～東北地方の日本海側への弥生文化の伝播を検討するうえでも重要な資料となるものとおもわれる。

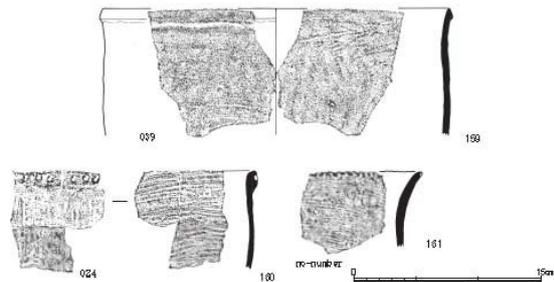


図4 丸山河床遺跡出土突帯文土器

②上記の結果を受けておこなった、周辺地域における遺跡情報の検討では、近畿北部地域（敦賀平野を含む若狭・京都府北丹波・京都府丹後・兵庫県丹波、兵庫県但馬の地域）の弥生前期遠賀川式土器および縄文晩期末突帯文土器出土遺跡を網羅的に抽出し、それら77遺跡の位置情報・土地条件・存続期間・出土遺構や遺物などの詳細情報をデータベース化するとともに、GISソフト（カシミールver.8.8）上において表示させ、解析検討をおこなった。対象とした地域の時期別遺跡数の変動は、（表1）のごとくである。

表1 近畿北部地域・時期別遺跡数

地域／時期	滋賀里IV	船橋長原	I期古中	I期新
但馬北	0	2	1	9
但馬南	0	6	4	10
兵庫丹波	0	3	0	3
丹後	2	1	10	6
北丹波	2	7	4	5
若狭	2	4	2	8
時期別系	6	23	21	41

遺跡数の変動の側面では、北近畿地域全域で、晩期遺跡が希薄な中で、終末期の突帯文土器すなわち船橋・長原式の出土遺跡は、但馬南部や北丹波といった内陸部にやや偏る傾向が認められることが注意される。一方、前期遺跡では、丹後地域でまず遺跡数の増加が認められることから、この地域が日本海域での弥生文化の伝播にあたって重要な位置を占めることを如実に示している。前期新段階に遺跡数として全域でかなり増加するが、中期以降に継続していく遺跡は多くなく、丸山河床遺跡周辺においても、中期前半代の資料はほとんど出土が知られていない。しかしながら、丹後では扇谷、但馬では東家の上といったような、丘陵上に立地し大規模環濠を伴うような弥生前期末～中期初頭の遺跡存在が知られている。近畿南部では顕在化していないが、前期末において集落の断絶を伴う社会的な緊張関係が生じていた可能性が高いと考えられ、今後若狭地域においても同種の遺跡存在に注意をはらっていく必要があるものといえる。今回は前期段階までの遺跡動向検討にとどまったが、今後の課題と考えている。

以上のように、近畿北部地域において、縄文晩期末の突帯文土器から弥生前期の遠賀川式土器への変化を、出土遺跡の動向も含めて包括的に情報収集し、解析結果を示した研究は少なく、今後の社会動態を検討するうえでの基礎情報としても十分に活用が期待できるものと考えている。これらの結果は、成

果報告の出版物（『若狭における弥生時代前期の遺跡——小浜市丸山河床遺跡の出土資料——』）として刊行するとともに、PDFを京都大学学術情報レポジトリにて公開し、活用している。

ただし残念ながら、近畿北部の縄文晩期～弥生前半期には、住居や墓地など遺跡内容が判明している事例が極めて乏しいこともまた、同時に把握される結果となった。このため、近畿南部で実施できたような数量的検討や、集落規模や人口動態といった本研究課題の最終目標に到達するための有為な情報を蓄積するには、やや至らなかった。今回の成果によって求められる情報はより明瞭化したことから、今後は機会を得て、学術調査の実施を試みるとともに、稀少な情報を如何にシミュレーションに活用するかを検討していくことも、課題として残されたものと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

1. 伊藤淳史「近畿北部における「弥生化」の諸問題——小浜市丸山河床遺跡資料報告の紹介を兼ねて——」『みずほ』第42号、45-58頁、2011年、査読無

2. 伊藤淳史「鴨東の古代——古墳～奈良時代の遺跡調査成果からみた集団動態——」『京都大学構内遺跡調査研究年報』2007年度、95-127頁、2010年、査読無

〔学会発表〕（計4件）

1. 伊藤淳史・杉山拓巳「日本海側における遠賀川式多量出土の東限——福井県小浜市丸山河床遺跡の出土資料——」日本考古学協会第77回総会研究発表（ポスターセッション）、一般社団法人日本考古学協会、2011年5月29日、國學院大學

2. 伊藤淳史「若狭における弥生時代のはじまり」平成21年度若狭歴史民俗資料館郷土史講座、2009年5月17日、福井県立若狭歴史民俗資料館

3. 伊藤淳史「山城地域の弥生前期」近畿弥生の会設立10周年記念大会、2007年7月1日、天理大学ふるさと会館

4. 伊藤淳史「「倭国」の形成と古代以前の山城——弥生・古墳時代の考古学から——」京都府立婦人教育会館歴史講座、2007年6月9日、京都府立婦人教育会館

〔図書〕（計1件）

伊藤淳史『若狭における弥生時代前期の遺跡——小浜市丸山河床遺跡の出土資料——』科学研究費により 200 部を印刷し配布、2011年、49 頁、<http://hdl.handle.net/2433/139549>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 淳史 (ITO ATSUSHI)

京都大学・文化財総合研究センター・助教
研究者番号：70252400